

同志社クロージングアップ

同志社創立150周年記念イベントのご紹介

法人部

法人事務部 創立150周年記念事業事務局

Doshisha New Day 開催

Doshisha New Dayとは、「同志社の未来をつくるための特別な1日」のことである。今年で3回目となり、創立記念日の11/29に同志社大学ハーディーホールで開催した。遠方の方のためにオンライン配信も行い、合わせて約

160人の参加があった。

今回の中心は、同志社大学出身の2人のアスリート、北京オリンピック陸上男子4×100mリレー銀メダリストの朝原宣治さん（1995年同志社大学商学部卒業）と陸上1,000,000mの日本記録を持つ田中希実さん（2022年同志社大

学スポーツ健康科学部卒業）による対談であった。登場前には、同志社大学応援団が演舞を披露し、会場の雰囲気は大いに盛り上がった。

対談のテーマは「世界に挑む」で、世界の強豪選手と競い合ってこられたお二人から貴重なお話を聞くことができた。陸上競技について、精神面やメンタル面の視点、トレーニングの取り組み方、また父をコーチに持たれる田中希実さんの親子の関係性にも話題が広がり、とても興味深い内容であった。また学生からのインタビューでは、学生時代のエピソードを伺うことができ、お二人とも「自由」という共通のキーワードについて話され、同志社の卒業生らしい一面を感じた。

次に、今年度を実施した同志社創立150周年記念事業について同志社未来創造プロジェクトメンバーから、「同志社ウエディング」「全同志社人がつなぐ150km」「お菓子作り教室」「オリジナル賛美歌『王の道を行こう』」の4





件の紹介があった。

その後は、2024年度に予定している事業の中からアメリカカグレイス教会における記念礼拝と全同志社合唱祭の紹介（2024年11月9日、京都コンサートホール）があった。合唱祭参加団体であるCCDアルママータと同志社グリーククラブのOBによる歌の披露もあった。アメリカカグレイス教会における記念礼拝（2024年10月10日（木）～15日（火）4泊6日）についてはこの後に記載している。また、新島襄に関するアニメーション制作についての説明もあり、制作のための寄付のお願いがされた。

最後に、同志社大學應援團と合唱団のカレッジソングにより、今年の Doshisha New Day が幕を閉じた。

当日の様子は「同志社創立150周年事業公式

YouTube」からご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/@doshishasourisu150>

同志社創立150周年記念トークショー開催

11月29日（水）、同志社礼拝堂にて、「卒業後の可能性は無限大！ーわたしたちが理系からマスコミへ進んだ理由ー」と題した同志社創立150周年記念トークショーを開催した。

八田英二同志社総長・理事長挨拶の後、大学ハリス理化学研究所柘太一助教、日本テレビ放送網株式会社アナウンサー山本健太氏、株式会社毎日放送報道情報局報道センター記者横田舞氏の3名によるトークショーが始まった。

3名の登壇者には二つの共通点があり、一つは「理系の大学院で学んだ」こと、もう一つは、「そこから研究ではなく、「社会に広く伝える」という仕事を選んだことである。柘助教がファ



シリテーターとして、動画や写真を交えながら、2名の現在の仕事、学生時代の生活及び研究、大学在学中にやっておいて良かったこと、マスコミに進んだ理由について等、多様なテーマでのトークが展開された。時に会場からは笑いも起こり、登壇者・参加者ともに一体となった和やかな時間が刻まれた。



最後に質疑応答がなされ、学生、生徒、児童から次々に積極的な質問がなされ、3名の登壇者からの分かりやすく丁寧な回答を真剣な面持ちで聞いていた様子が特に印象的であった。

新島襄のラットランド・アピール 150周年記念ツアーのお知らせ

1874年10月9日、アメリカ合衆国ヴァージニア州ラットランドのグレイス教会 (Grace Congregational Church) におけるアメリカン・ボード (伝道団体) の年

次大会の最終日。留学を終えて宣教師として帰国する直前、新島襄は大勢の会衆の前で、キリスト教主義学校を日本に設立するという志を熱く語り、約5,000ドルの寄付の約束を得て、それが同志社の礎となりました。新島のラットランド・アピールから150周年にあたる2024年10月13日(日)に、グレイス教会において、記念礼拝を執り行います。

・期間：2024年10月10日(木)～10月15日(火) 4泊6日

・旅行代金：575,800円＋燃油サーチャージ
及び国内外空港税、他

<https://150th.doshisha.ed.jp/150th-info/detail/256>



ハリス理化学研究所研究発表会を開催

大学

2023年11月4日（土）、京田辺キャンパス恵道館において、ハリス理化学研究所研究発表会を開催しました（共催：同志社大学理工会）。

開会に際し、研究発表会実行委員長・秋山いわき生命医科学部教授による挨拶があり、引き続き北岸宏亮理工学部教授による『同志社発で世界初！～一酸化炭素中毒の治療薬の開発～』と題した公開講演会が開催されました。本講演では、北岸教授が本学において長年にわたり研究開発してきた人工ヘモグロビン化合物である hemoCD について、その開発の経緯が紹介されました。さらに、建物火災等で頻繁に発生する一酸化炭素中毒に対して hemoCD が治療薬として有効であることや、救急救命用医薬品として社会実装するための将来展望が述べられました（※）。



講演中の北岸宏亮教授



講演会場の様子

ハリス理化学研究所

※本研究に基づくプロジェクト「世界初の一酸化炭素中毒に対する解毒剤及び当該技術を活用した他のガス中毒の解毒剤の開発」は、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）「大学発新産業創出基金事業（プロジェクト推進型 起業実証支援）」の2023年度新規プロジェクトに採択されています。

講演会後は、北岸教授、

榎太一ハリス理化学研究所

助教、鈴木祐太助教、理

工学部・理工学研究科OG

によるトークセッションが

行われました。本セッション

では、北岸教授の公開講

演会発表資料を題材とし、

科学研究を一般に広く伝え

る「サイエンス・コミュニ

ケーション」の方法や考え方について、科学者と一般市民

の考え方のギャップ等を取り上げた議論が繰り広げられま

した。セッションの終わりには、ハリス理化学研究所所長・

出口博之理工学部教授による総括が行われました。

その後は4つの会場に分かれ、文化情報学部、理工学部、

スポーツ健康科学部、グローバル・コミュニケーション学

部、ハリス理化学研究所所属教員による助成金成果発表、

ポスター展示による部門研究成果発表、創造科学教育夏期

研修報告会等のプログラムが展開されました。



トークセッションで解説する榎太一助教

発表会終了後は、

日糧館に会場を移し、

教職員、学生及び一

般参加者が一堂に会

しての懇親会が行わ

れました。和やかな

雰囲気の中、あっと

いう間に時間が経過

し、最後は、円陣を

組んでの Doshisha

College Song 合唱

で締め括られました。



懇親会場の様子

【付記】ハリス理化学研究所では、次の行事を予定して
います。みなさまのご参加をお待ちしております。

◆ 8・9月 ・ 創造科学教育夏期研修

・ 加藤与五郎実験教室

◆ 11月 ・ 創造科学教育夏期研修報告会

・ ハリス理化学研究所研究発表会

◆ 年4回 ・ ハリス理化学研究報告刊行

FROM NOW ON - 地球をトク equality

女子大学

学芸学部メディア創造学科教授

高木 たかぎ

穂子 ほりこ

FROM NOW ON イベントのデザインを通じ、 人類の地球での存続を自分ごととする

『人類は地獄の門を開けてしまった』国連事務総長であるアントニオ・グテレスは、2023年9月にニューヨークで国際的な連合を前に演説した。『地獄の門』は、既に世界中で起き出している気候変動・異常気象による災害のことを指す。

パンデミック、不景気、戦争、犯罪などのニュースが重なる日々、どのような形でいつ訪れるか不明な環境問題による災害や気候変動は、つつい後回しにする一方、状況は刻々と悪化している。

アメリカの現代作家であるジョナサン・サフラン・フォアはこの現象を“crises of imagination”と名付けている。私を受け持つ授業やゼミで取り上げているこのテーマに、

カンファレンスという形で様々な分野の視点を取り入れ、学生と共に学びたいという思いから、2022年度に始めた企画をこれから紹介したい。

1日のミニカンファレンス

クリスマス1週間前の日曜日（2023年12月17日）、1日限りのカンファレンス「FROM NOW ON」が開催される。この企画は、同志社女子大学学芸部部の3学科（メディア創造学科、国際教養学科、音楽学科）の学生が履修できる「ジョイントプログラム」に基づいている。

学芸学部にも所属する学生が1年次から受講できるこの授業では、学科を超えてのグループワークによるイベント企画・運営方法を学ぶだけではなく、現21世紀の課題に対してどのような立場があり、どのように議論できるのかも学ぶ。更に問題意識を持った上で、他者にどのように情報共

有するかを考えるきっかけともなる。

タイトルに込めた思いとプログラム

カンファレンスのタイトルである「FROM NOW ON」は「これから」を意味し、過去の誤りや未練を悔やむことよりも、未来に目を向け、現在の行動を改善する姿勢を取るよう訴えている。環境問題を軸とし、1年目の2022年度は誰もが1日3回とはっている食事の選択が地球に与えている負荷をテーマとするイベントであった。2年目である今年、女性差別・ジェンダー差別と環境問題の関連性について学び、トークゲストには3名の専門家を招いた。Nandita Bajaj 氏（人口と地球環境、インド・カナダ）、Luisa Mok 氏（SFとデザイン・フィクション、香港）、小松正史氏（音と社会包摂、京都）の講演により環境とジェンダーの関連性について多様な視点から共に学び、一緒に考えた。また、音楽学科の松下悦子教授による歌唱や、環境・ジェンダーに関する展示会やゲーム、ワークショップなども開催した。

2024年度の3年目は、この人類の課題を解決する為に欠かせない「コミュニケーション」を題材とし、高木が担当するジョイントプログラムは完結する。



「食」について考える探究的な学び〜 School Meals Project 〜

中学校・高等学校

英語科教諭

反田 任

1 授業デザインについて

中学校では今年度、中学1年生で複数の教員がグループになって探究的な学びを計画し実施するという取り組みに取り組みました。私のグループは英語、社会、数学、理科、保健（養護教諭）担当の教員からなる構成でした。中学1年生の英語ではTime Zonesという教科書を使用しています。その中に各国のSchool Mealsについての話題が出てきます。今回はそのテーマを取り上げ、探究的な学びの授業デザインを考えました。

まず、週1回の授業（担当は8クラス）でどのような流れで授業を展開するか、次に述べる5つのポイントを視野に入れながら、授業をデザインしました。

① グループの担当教員5名が授業にどうかかわるか

授業内で担当教員からそれぞれの専門分野の視点から話をしてもらう場合、8クラスにわたる時間割変更は困難で

あることから担当教員が10分以内の「アドバイスビデオ」を制作、生徒に見てもらうことにしました。

② 学びの時間をどう確保し、デザインするか

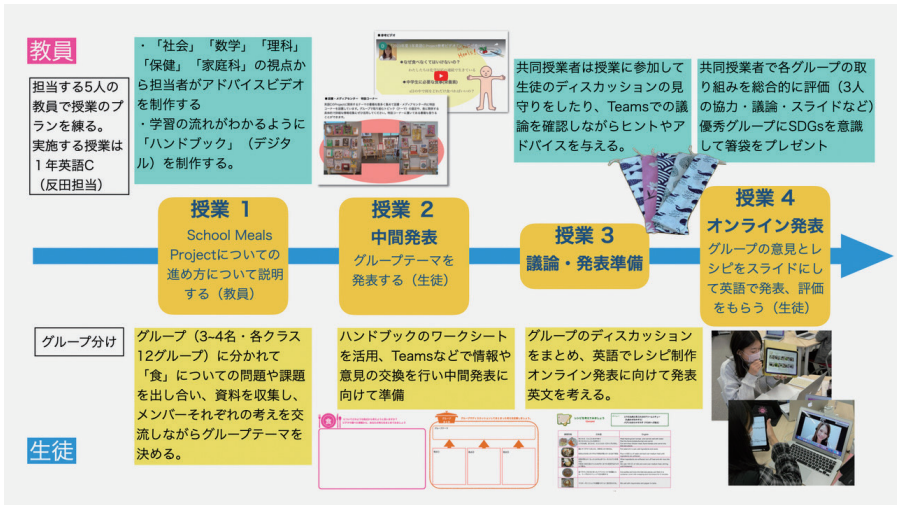
探究的な学びを保証するために、授業時間だけでは不十分であるため、TeamsやKeynoteの共同制作を活用しながら、グループ内の情報共有やプレゼンテーション制作を進めました。

③ 探究的な学びの手順を示し、学習に見通しを持たせる工夫をどうするか

ブック（PDF、Epub形式）を制作し、生徒に配信して学習目標・内容・手順などがわかるガイドとしました。

④ 学習内容を一人ひとりが理解し、自分の学びとする

グループで決めたテーマにもとづく調査をベースに自分たちが考える理想のSchool Mealのメニューを考え、レシピーを制作します。さらにグループでそれらを統合し、発表スライドにまとめます。



授業の流れ

⑤ 発表の方法と評価 (学習の振り返り)

一対一でネイティブ講師と取り組むオンライン英会話のレッスン (25分) を活用し、発表内容を英語で発表します。オンラインの講師の先生からは、プレゼンテーションの内容について英語で質問が出され、返答も行います。(授業の流れについては、ページ上段の図を参照)

2 ICTと探究的な学び

探究的な学びにICTの活用は欠かせないものです。情報収集は言うまでもなく、グループ内での情報・意見交流、教師からのアドバイスやプレゼンテーションスライドの共同制作に活用しました。情報や意見の交流の場としてのTeamsの活用は授業と授業の間のシームレスな学びにつながりました。教室 (授業) だけでなく、時間・空間を超えて、グループのメンバーと繋がりが、学ぶことができました。また生徒たちは共同授業者の制作したビデオを何度も見返すことで学習内容の理解がより深まりました。また、プレゼンテーションを説得力のあるものにするために、データを活用するなどの工夫もみられました。

このようにして「食」について考え、「健康」、「伝統食」「食品ロス」「食料の流通問題」「環境と食」「食品アレルギー

「」などのテーマをグループで決めて調査し、その調査にもとづいて School Meal のメニューを考え、分担して調理し、レシピを仕上げました。

3 中間発表と最終発表

中間発表では各グループで調べた内容をもとに、各グループが取り組むテーマを発表、最終発表ではグループでまとめた内容とレシピについて英語で発表しました。

中間発表ではグループのチームワーク、最終発表では個人の英語と発表する力が試されましたが、どの生徒も真剣に取り組んでいました。

特に英語で発表する前には、AI発音チェックアプリも活用し、英語をスムーズに発音する練習も行いました。



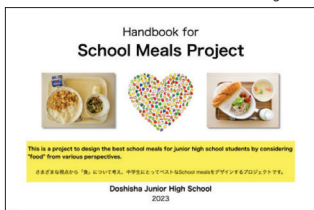
中間発表と最終発表の様子

4 生徒が主体的に学ぶ環境づくり

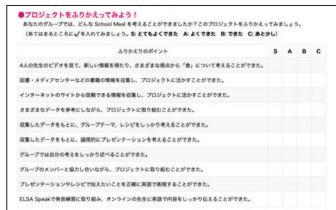
今回、5人の教員で協働して取り組んだ授業は教科横断型の授業であり、またSDGsや環境問題、STEAMなどさまざまな要素を含むものでした。また生徒の成果物であるレシピには生徒のさまざまな考え方やアイデアが込められていました。「オープンエンドの問い」によって、生徒の思考力、創造力を育むことができたのではないかと思います。

また、ハンドブックによって、「学びの目標」を明確にし、ICTを活用することで、生徒が常に学ぶことができる環境を構築し、深い学びに繋げ、さらに英語で発表し、学校内外の人からの評価を受ける流れがデザインできます。

今回の授業実践が教科横断型の授業は他教科との調整が難しいという点をクリアする一つの方法として参考になればと思います。



制作したデジタルテキスト



振り返りシート

雪不足に負けるな！ 同志社香里中学・高校スキー部

香里中学校・高等学校

体育科教諭

スキー部顧問

竹田 たけだ

幸平 こうへい

同志社香里スキー部の歴史

私が生徒として同志社香里中学校に入学し、スキー部に入部したのが53年前でした。中学1年生の私にとって、高校3年生の先輩は本当に大きく見えました。その後、教員として学校法人同志社に入社し、同志社香里中学校・高等学校配属、同時にスキー部顧問となり37年が過ぎ、現在に至っています。

同志社香里スキー部自体は今から61年前、1962年に産声を上げました。当時はスキーの好きな生徒と教員が冬休みにスキーをしに山に行くというレベルの研究会からのスタートでした。徐々に部員も増え数年後にはクラブに昇格し、志向も競技志向に変化して大会に出場しました。毎年、大阪、近畿、全国を目指す競技クラブとして代表選手を送り出しながら今に至っています。大阪府高校選手権

においては男子の部で過去72回の開催中、総合で現在の14連覇を含む46勝、2000年より共学化し、併設した女子の部も23年間で総合6勝、近畿大会においても過去総合7勝と押しも押されもしない名門スキー部に成長しています。

スキー競技について

一般的にスキーというと、華やかなBGMのかかるスキー場で白い雪にまみれながら楽しく滑って、疲れるとレストハウスでお茶を飲んで過ごす、夜は宿屋や温泉街でアフタースキーを楽しむといったイメージがあると思います。同志社香里スキー部の目指す競技スキーはそういったイメージとはかけはなれています。早朝からリフトが止まるまで、指定された競技コースにポールで制限されたコースを設定し、吹雪の中でも競技用の空気抵抗の少ない、体にび

ったりとしたワンピースを着て、ひたすらタイムアップを
目指して滑り込む、夜はミーティングとスキートのチューン
ナップに明け暮れるといった生活を送ります。また、クロ
スカントリー競技もあり、これは3〜15kmの野山に設定
されたコースを4cm程度の幅の細い専用のスキーで走りタ
イムを競います。かなり過酷な競技でゴールした選手の顔
にはよだれがツララのように下がっていることもあります。
このように一般のスキーヤーとは一味も二味も違ったスキ
ーになっています。

雪なし県におけるスキー部の意義

過去に同志社香里の中でもスキー部に対する風当たりは
順風なものではありませんでした。『雪なし県の大阪府に
なぜスキー部なんかが必要なのか』、『三学期に大会が集中
してほとんど学校にこられないじゃないか』、『金食い虫』、
『たった何日間だけの競技のために雪のない時期に延々
と走る意味があるの?』……。これらの言葉はまさにそ
の通りで、季節競技であるスキーは当然冬しかできず、大
会も冬に集中し、近隣府県において日帰りで実施される他
の競技とは違ってどうしても宿泊を伴い、同時に多額の費
用も必要になってきます。ただ、スキー競技に触れ、スキ

ーの楽しさを知っていただければ、これらの言葉が無為な
ものであることがわかっていただけたと思います。自然を
相手にする競技の厳しさ、理不尽さの中で多くの犠牲を払
いながらも一生懸命にトレーニングを重ね大会に向かって
いく生徒たちは、平穏な日常を大阪で過ごしている一般の
生徒と一線を画す何かを得ていると感じます。また、同志
社香里にはスキー部のように中高6年の各年代の生徒が一
緒に活動しているクラブが複数存在します。縦の関係が希
薄になりつつある昨今、こういったクラブで過ごすことは
非常に得難い6年間を過ごすこととなっています。上級生
は自分のことだけではなく、下級生の技術指導だけでもと
どまらず、生活から安全管理までも目を配ります。下級
生は自分がクラブに対して貢献できることを一生懸命努力
するといった伝統が生まれています。くわえて、長期間の
宿泊を伴う共同生活で得られる一体感や規律は生徒たちの
これからに大きな影響を与えていると感じます。

多くの犠牲と学校、保護者その他多くの人たちの協力が
ないと成立しないスキー競技ですが、選手達に私が常に言
っているのは『愛される選手になれ』という言葉です。こ
の言葉は他校の先輩監督さんの言葉だったのですが、選手
として一番大切なことだと思っています。勝利ももちろん

大事です。しかし、自分勝手に周りに気を使えない、感謝の気持ちのない選手では誰も共感も応援もしてくれません。スキーといったある意味特殊な競技において、生徒たちにとって大切な言葉と思っています。

スキーを取り巻く環境とこれから

ここ数年、スキー競技は地球温暖化の影響で、予定されていた大会が中止になったり、十分な練習環境が整わないなど非常に深刻な状況に置かれています。兵庫県でおこなわれている近畿高校選手権もここ5年で雪不足のため3度中止されています。また、スキーブームも過去の話となり、スキー客の減少に伴い、スキー場の閉鎖も相次いでいます。宿泊費や用具価格もどんどん値上がりし、競技を続けるには決して良い環境ではなくなっています。こういったことも影響し、近年ではスキー部に入学してくる生徒も少なくなってきたのが現状です。

今後、スキー部、ひいては「スキー」は一体どのような状況になっていくのでしょうか。このまま尻すばみでなくなっていく運命にあるのでしょうか。あるいは形を変えた環境の中で生き残っていくのでしょうか。

しかし、私はスキーという生涯楽しめるスポーツがこれ

からも消えることなく盛んになっていくと信じています。とくに自然を相手に真っ白い雪の中、必死で奮闘するスキー部の生徒たちがスキーを通して多くのことを学び、将来にわたってかけがえのない財産として成長していく姿がこれからもずっと続いていくことを願ってやみませ



DOSHISHA KORI SKI TEAM

海外語学研修の再開と新しいプログラムの導入について

女子中学校・高等学校

教諭 林 昌美 はやし まさみ

海外語学研修の再開

新型コロナウイルスの影響で数年間中止が続いていた海外語学研修が、約四年ぶりに再開しました。中二・中三対象のオーストラリア語学研修、中三対象のニュージーランドチーム留学、アメリカヌエバ校派遣プログラム、高一・高三対象のイギリス語学研修を実施でき、本校の海外語学研修がやっと戻ってきました。

実際に日本とは違う国で、ホームステイを経験したり、現地校に通ったり、歴史的な場所を巡ったり、文化体験をしたりと、様々な経験をすることができました。自分の英語が伝わった喜びや、現地の方々と交流する喜びを感じ



イギリス Malvern Collegeにて

しながら、文化や考え方の違いにも気づくことができました。ホストファミリーとも多くの時間を共有し、英語だけではなく、国境を越えた人との繋がりを持つこともできました。今回得られた貴重な経験を、一人一人があらゆる形で未来へと繋げていくことを願っています。

ニュージーランドチーム留学の導入と実施

本校では、コロナ前からチーム留学の導入を検討していたものの、コロナの影響で中止が続き、二〇二二年度に初めて「ニュージーランドチーム留学」を実施することができました。チーム留学は、約三ヶ月ニュージーランドハミルトンで過ごすプログラムです。これまで本校では、二週間程度の海外語学研修をいくつか実施してきましたが、グローバル時代を見据え、現地校で一チーム過ごすという、より実践的な留学を導入することとなりました。プログラムの概要としては、語学学校にて約二〜三週間の英語研修、その後、伝統あるキリスト教主義の女子校である Sacred

国内語学研修の導入と実施

Heart Girls' Collegeに通います。現地の第一チームが始まる時期に通い始め、一ターム現地校で生活を送ります。英語を学ぶ世界各国からの留学生と共に過ごす語学学校での研修、ニュージーランドの現地校での生活を経験した参加者たちは、自らの力で様々な困難を乗り越え、大きく成長しました。この留学を通して広い世界を感じ、今後グローバルリーダーとして活躍してくれることでしょう。今年度も一月から三月までの日程で三名が参加します。生徒たちがどう成長して帰国するのか、三か月後が楽しみです。



語学学校での英語研修



現地校での学校生活

海外留学にとどまらず、今年度から新たに、東京で二泊三日の国内語学研修を導入し、実施しました。中学二年生と三年生の希望者が、このプログラムに参加しました。英語研修を実施したTokyo Global Gatewayでは、「アトラクションエリア」において、飛行機内、ホテル、店舗などの場面で、実際に注文したり、ホテル予約をしたりと、状況に合わせて実践的な英語表現を学びました。日本にながら、まるで海外にいるような体験ができ、わくわくしながら英語を使っている生徒たちの姿が多くみられました。また、「アクティブイメージジョンエリア」においてはダンスパフォーマンス、ニュース番組の制作、コマ撮り作品制作、多文化理解、ディスカッションなど様々なプログラムに参加し、「英語を学ぶ」のではなく、「英語で学ぶ」体験をしました。普段とは違う環境の中で、常に英語を使って過ごす体験が、参加者の英語学習への意欲を高めたと思っています。また、様々な国出身の先生方との出会いを通して、異文化や多様な考え方にも触れることができ、大変有意義な研修となりました。



ニュース番組の制作

総合的な探究の時間の可能性 〜同志社国際高等学校のとりくみ〜

国際中学校・高等学校

教頭 西田^{にしだ} 喜久夫

文部科学省の高等学校学習指導要領の中で、「総合的な探究の時間」の目標は、以下のように説明されている。

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することを旨とする。

従前の「総合的な学習の時間」から今回の「総合的な探究の時間」に改編されるにあたって強調されたのは、「学習」と「自己の在り方生き方」の関係性、言い換えれば、学びが社会とのつながりを意識しているかということになる。

「総合的な探究の時間」は教科を越えた横断的なものであり、生徒の主体的な取り組みはもちろんであるが、生徒を主体的・対話的な学びに誘うための教員側の「主体的・対話的な」教材準備が求められている。

本校では2022年度から、学年ごと・学期ごとに学習テーマを設定し、「総合的な探究の時間」に取り組んできた。以下、2023年度のテーマの一部である。

高校1年 まちづくりについて
 高校2年 平和について
 高校3年 生きること

高1での具体的なものから、学年進行で抽象的な内容になり、より内省する機会が増えるものとなっている。外部からの講師を招いて知識を深める（例えば、今年の高校1年の二期には京田辺市の市長に来ていただいて、京田辺市や自治体の考える「まちづくり」という、普段自分たちでない視点から学んだ）とともに、その後の生徒間の活発な討論や発表を通じて、学びを共有し深化する作業を行う。ここまでは一つのパッケージである。

点数化しない学びであるが、この学習を通して生徒達ができるものは多いはずである。

6年生修学旅行 鹿児島・熊本方面

国際学院

初等部教頭 **風間 寛**
かざま ひろし

国際バカロレアのカリキュラムとリンクした 修学旅行

九月二十六日から三泊四日で、初等部六年生は九州方面へ修学旅行に出かけました。

国際バカロレアの初等教育プログラム（IB PYP）認定校である本校では、校外学習や宿泊学習のねらいと、「探究の単元」で学ぶ概念とを関連付けています。この修学旅行においても、ねらいの一つを「人類の進歩が与える自然界への影響について理解を深める」と設定しました。

さて、一日目は伊丹空港から鹿児島へ。最初に訪れたのは、この場所から数多くの若者が「神風特別攻撃隊」として、片道の燃料しか積んでいない飛行機で飛び立っていった知覧（鹿児島県南九州市知覧町）です。知覧特攻平和会館やほたる館、富屋食堂で、語り部の方のお話を熱心に聞

いたり、質問をしたり、また資料に見入ったり、メモを取ったりしながら、過去の戦争や平和について考える時間となりました。

二日目は新幹線で新水俣駅へ。水俣病資料館・総合研究センター、熊本県環境センターでは、水俣病や環境保全について、グループに分かれて見学しました。午後からは「山の中の海軍の町にしき ひみつ基地ミュージアム」を訪れました。ここは太平洋戦争中の一九四三年に建設された、人吉海軍航空基地であり、地下トンネルの中に作られた魚雷調整場





や兵舎豪、地下作戦室・無線室などがあります。子どもたちはここでも、地元の語り部の皆さんのお話を耳を傾けながら、ミュージアムの中や地下トンネルの中を見学していました。

三日目は、環境と自然について学びました。(株) ビツグバイオでは「B B菌」による水質浄化、(株) 日本リモナイトでは鉱物資源であるリモナイト(阿蘇リモナイト)を使った土壌改良・水質浄化の取り組みについて見学や体験をさせていただきました。

最終日は益城町にて、傾いた家屋や地表に現れた断層など、熊本地震の爪痕を見学しながら、地震の恐ろしさを肌

で感じました。その後熊本城の見学、最後に日本キリスト教団草葉町教会にて同志社ゆかりの「熊本バンド礼拝」を実施し、熊本空港から岐路につきました。

この修学旅行を通して、子どもたちは反戦平和に関すること、自然災害に関すること、そして熊本バンドに関することなど、多くのことを学びました。この経験を生かして、今後の探究の学習に生かしてほしいと思います。



台東大学附属小学校との交流

小学校

2023年10月17・18日、台湾の台東大学附属小学校（國立臺東大學附設實驗國民小學）から訪問団が来校し、同志社小学校の児童、教職員と交流を行いました。

台東大学附属小学校は、台湾南東部の台東県にある国立の小学校で、豊かな自然に恵まれ、原住民族文化が色濃く残る台東県は、芸術の街としても注目されています。

台東大学附属小学校と同志社小学校は、本校に近接する人間文化研究機構 総合地球環境学研究所とのご縁で2010年より交流が



始まり、2016年には人的交流協定締結に至るなど、10年以上積極的な交流を深めてきました。

今回は、コロナ禍を経て4年ぶりに、児童30名と教員6名が来校されました。

1日目は、本校の6年生児童と台東大学附属小学校の児童がグループで京都観光を楽しみました。英語と道草の授業で準備してきた手作りのパンフレットや会話用のメモを片手に、グループごとに散策しました。散策後は、同志社大学に集合し、



教諭
振本 ありさ
ふりもと



良心館食堂で昼食を共にしたり、キャンパス見学を楽しんだりしました。

2日目は、5・6年生が授業交流とクラブ活動を楽しみました。台東大学附属小学校の児童が本校の6年生に台湾原住民の文化を紹介し、一緒にブレスレットを手作りしたり、5年生が事前に羽子板に描いておいた絵に台東大学附属小学校の児童が色を塗り、その羽子板で一緒にはねつきを楽しんだりしました。また、お互いの町や人々の暮らしについて、英語ですごくをしながら紹介し合いました。

コロナ禍を経てようやく再開した交流行事。参加した児童からは、台湾の児童との個人的な交流エピソードが多く語られるなど、対面交流の意義を再認識した行事となりました。これを機に、引き続き様々な国際交流の再開を模索しつつ、本校の国際化教育の推進につなげていきたいと思っています。



中庭のクスノキ
(2022年度撮影)

新園舎に移転して3年目の幼稚園（シャロームハウス）。敷地内には、同志社大学・旧フレンド・ピース・ハウスから引き継いだ大木（銀杏・クスノキ：他）があります。中庭のクスノキもそのひとつでした。これからも長くこの地を見守っていくかと思われた大木でしたが、去年、木の表面にキノコが生え始め、木の寿命が残りわずかであること

幼稚園 中庭「クスノキ」の伐採 〜お別れ礼拝と遊歩道の設置〜

幼稚園

教諭

遠藤 えんどう

稚絵 ちえ

が判明しました。このままでは倒木の危険もあるとして、残念ながら伐採を決めました。

2022年11月。伐採が決まったクスノキを囲み、全園児でお別れの礼拝を行いました。これまでこの場所や沢山の人々を見守ってくれたことに感謝を捧げ、讚美歌を歌いました。子ども達はその様子が印象的であったようで、くちぐちに保護者に伝えたこともあり、保護者の方も大木の最後の姿を目に焼き付けておられました。

そして2023年8月、クスノキの伐採工事が終了しました。園庭から中庭が横断できるように、その場所に枕木を埋め、遊歩道ができました。中庭の遊歩道は子ども達だけでなく保護者の方に通っていただくことができ、園舎の中に新たな動きが感じられる空間となりました。残した大きな切り株の周辺には、小さな草花が芽を出し、子ども達にとって人気の場所となっています。



お別れ礼拝の様子
(2022年度11月)



幼稚園リチャーズホールから見る
伐採前のクスノキ (2022年11月)

幼稚園には新しい園舎とともに、歴史ある銀杏並木や旧門なども共存しています。引き継いだ沢山の大切なものを守りながら、同時に子ども達や保護者の方々、そして教職員が一体となって、新しい歴史を紡いでいくことができますようにと、この度の伐採を機に、思いを新たにしました。



2023年8月完成 中庭の遊歩道